九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

高校一流サッカー選手のキャリア形成過程とキャリア志向

山本，教人
Institute of Health Science, Kyushu University

多々納，秀雄
Institute of Health Science, Kyushu University

吉田，毅
Institute of Health Science, Kyushu University

三本松，正敏
Fukuoka University of Education

他

https://doi.org/10.15017/683

出版情報：健康科学. 21, pp.29-39, 1999-03-15. 九州大学健康科学センター
バージョン：
権利関係：

高校一流サッカー選手のキャリア形成過程とキャリア志向

山本教人　多々納秀雄　吉田　毅
三本松正敏*　松尾哲矢**

Career Developing Process and Career Orientations of Elite Soccer Players in Japanese High School

Norihito YAMAMOTO, Hideo TATANO, Takeshi YOSHIDA,
Masatoshi SANBONMATSU* and Tetsuya MATSUO**

Abstract

To clarify the career developing process, the actual conditions of ongoing career life and career orientations of elite high school soccer players, a research was undertaken. The subjects of this research were 280 elite high school athletes who were belonging to 16 high schools. The main results were as follows.

Athletes were exclusively involved in soccer from the earlier time of their life. Soccer was a significant part of their life, and they wanted to be a superior athlete in the future. They started to play soccer at the local and school clubs with their self decision and the influences of media and friends. For a few people, soccer was an influential factor to go on to junior high school. In contrast to the above, when people went on to high school, soccer became a crucial factor. These findings of this study partly supported the existing results concerning to the career developing process as an elite athlete.

They spend 1 to 2 months a year for an expedition. It was supposed that their anxieties about their future life, occupational status and academic ability were caused by this fact.

After graduating from high school, over 40% of athletes want to go on to university. The athlete who wants to be professional soccer player after graduating high school was a few.

Key words: career developing process, career orientation, socialization into sport

(Journal of Health Science, Kyushu University, 21: 29－39, 1999)

はじめに

スポーツ社会学分野でかなりの研究成果が蓄積されてきた「スポーツへの社会化研究」[註1)]は，人があるスポーツ役割を獲得する過程に働く人的，環境的要因の影響を明らかにすることに主要な関心をおいてきた。社会化研究が隆盛を迎えた1970年代には，「スポーツ社会学国際調査委員会」が中心となり，大規模な国際調査が実施されているが，こうした研究は，スポーツ愛好者の量的拡大の条件を明らかにすること，さらには，単なるスポーツ文化の受容にとどまらない，スポーツ文化を創造，変革していける主体形成の条件を明ら

Institute of Health Science, Kyushu University 11, Kasuga 816-8580, Japan.
* Fukuoka University of Education, Munakata 811-4192, Japan.
** Faculty of Sports and Health Science, Fukuoka University, Fukuoka 814-0180, Japan.

かにすること，という実践的なねらいを持つものとして重要であるとされていた[10]。このような主張の背景にはもちろん，社会の急激な変化に伴う環境問題や，伝統的な共同体の崩壊という社会問題解決に対するスポーツへの期待があった。ところが1980年代に入ると，北米を中心に，いわば「スポーツへの社会化」の負の遺産であるバーンアウトやドロップアウト，選手の引退後の生活の諸問題に焦点化した研究が散見されるようになってきた。たとえば引退に関する研究では，エリート・スポーツからの引退は「社会的な死」であるとする見解に，様々な研究者が賛否両方の結論を提出してきた[1)~3),11)~13),17),20),21)]。このような研究上の変化は，まず第一に，「選手になることや選手であることへの着目から，選手であったことへの視点の移行」[19]として，そして第二に，「スポーツ参加の功罪について，…身体的・精神的影響（から）…，社会学的側面に関する影響」[註2]への関心の移行として特徴づけられよう。

ところで，近年成立した職業としてのサッカー選手は，若者のスポーツへの関わり方や，その後の進路にまで少なからぬ影響を及ぼしているであろうことは想像に難くない。しかしながら，野球や相撲と同様に，それが職業として極めて限られたものであることも自明である[註3]。職業人としてのスポーツ選手という経歴をたどることのできる者は一流と呼ばれる者のなかのまた少数者なのであり，多くが専心してきたスポーツとは無縁の職業経歴に踏み込まざるを得ない。また，職業人としてのスポーツ選手においても，他の職業と比較して著しく早い引退は避けられず，そこからまた新たな職業経歴へと入って行かざるを得ないのである。残念ながら，選手の引退や引退後の生活の分析は本研究の守備範囲外であるが，このようなことから本研究においては，個人が職業上たどっていく経歴，職業経歴を意味し，過去・現在の経験と同時に，将来の課題をも内包した動的な概念である[15]「キャリア」という概念を使用し，個人のスポーツ経験の変遷を捉えることにした。もちろん本研究の主題が，「高校一流サッカー選手への社会化」であったとしても，少なくとも研究目的の一部は正確に表現されてはいるのだけれど。

最後に，本研究の主要な目的を簡潔に述べておこう。まず第一の目的は，高校の一流サッカー選手を対象に，彼らがサッカー選手としてのキャリアを形成してきた経緯（あるいは，サッカー選手への社会化過程），現在の活動の実態とそれに伴う問題点，及び将来のキャリア志向などを明らかにすることである。そして第二の目的は，過去における社会化研究の結果と本研究の結果を比較し，差異を検討することである。

研究方法

1．調査の対象と方法

本研究で調査の対象となったのは，1994年３月20日，21両日に福岡市で開催された「FBS杯 全国高校招待サッカーフェスティバル IN 福岡」に参加した16高校のサッカー選手たちであった。招待された16チームのうち，12チームは全国大会などで実績を示したチームであり，４チームは九州の新人戦で実績を示したチームであった。

調査票は，大会開催前の監督ミーティングの席上各校監督に手渡され，宿舎での記入をお願いした後，大会開催期間中に回収された。各校20部，計320部の質問紙が配布され，283部が回収された（回収率88.4%）。このうち，回答の不完全な３部を除いた280部を分析の対象とした。

2．調査の内容

表１に示すように，本研究では，基本的属性要因，サッカー選手としてのキャリア形成に関わる要因，現在のサッカー生活に関わる要因，そしてこれからのサッカー生活に関わる要因を含めて調査票を構成した。これらを検討することにより，一流選手たちの過去のキャリア形成過程や，現在のキャリア生活の実態が，将来のキャリア志向との関わりで明らかになるものと思われる。以降，表１の要因順に明らかとなった結果について記述していく。

表１．調査の内容

基本的属性要因：
・身長，体重　・父親の職業，学歴，運動歴　・経済的な豊かさ ・体力の程度　・代表選手の経験
サッカー選手としてのキャリア形成に関わる要因：
・サッカーを始めた時期，きっかけ　・周囲のサッカー環境 ・活動を始めるにあたっての重要なる他者　・活動の時間 ・けが　・競技成績の満足度 など
現在のサッカー生活に関わる要因：
・いまの高校進学の決定理由　・遠征の日数　・活動の費用 ・けが　・競技成績の満足度 など
これからのサッカー生活に関わる要因：
・高校卒業後の進路　・Ｊリーグとの関わり　・将来の夢 など

表２．サンプルの属性

属性	N(%)	属性	N(%)
身長		父親の職業	
170cm未満	61(21.7)	農林漁業	10(3.6)
170cm～175cm未満	99(35.4)	会社員	147(52.5)
175cm～180cm未満	71(25.3)	公務員・教員	29(10.4)
180cm以上	45(16.1)	商業	6(2.1)
N.A.	4(1.4)	他の自営業	50(17.9)
体重		会社役員	15(5.4)
60kg未満	41(14.8)	その他	19(6.8)
60kg～65kg未満	86(30.7)	N.A.	4(1.4)
65kg～70kg未満	82(29.3)	父親の最終学歴	
70kg～80kg未満	65(23.2)	中学校卒	61(21.8)
80kg以上	2(0.8)	高校卒	117(41.8)
N.A.	4(1.4)	短大・専門学校卒	8(2.9)
高校		大学卒	77(27.5)
A校	18(6.4)	N.A.	17(6.1)
B校	17(6.1)	父親の運動部の経験	
C校	16(5.7)	サッカー部の経験がある	48(17.1)
D校	18(6.4)	他のクラブの経験がある	157(56.1)
E校	10(3.6)	クラブ経験はない	27(9.6)
F校	18(6.4)	わからない	40(14.3)
G校	18(6.4)	N.A.	8(2.9)
H校	19(6.8)	経済的豊かさ	
I校	17(6.1)	非常に恵まれている	42(15.0)
J校	17(6.1)	やや恵まれている	97(34.6)
K校	19(6.8)	どちらともいえない	119(42.5)
L校	18(6.4)	あまり恵まれていない	17(6.1)
M校	19(6.8)	恵まれていない	4(1.4)
N校	19(6.8)	N.A.	1(0.4)
O校	19(6.8)	体力の程度	
P校	18(6.4)	非常に恵まれている	14(5.0)
学年		やや恵まれている	63(22.5)
１年生	92(32.9)	どちらともいえない	119(42.5)
２年生	155(55.4)	あまり恵まれていない	59(21.1)
３年生	30(10.7)	恵まれていない	25(8.9)
N.A.	3(1.1)		

結果と考察

１．サンプルの属性

表２に示すように，まず，身体的な属性である身長と体重については，平均がそれぞれ173.3cm（SD 5.34），65.1kg（SD 5.94）であった。平成７年度の文部省の統計[14]によれば，男子高校生の平均身長が，３年生で170.8cm，体重が63.0kg であるので，いずれも高校３年生の平均値を上回っていることになる。

質問紙の回収状況についてのデータは，それが学校間で若干ばらついている（10部から19部）ことを示してはいるものの，いずれもが高校サッカー界においては実績を示しているチームであるだけに分析の対象外としなかった。調査対象者の学年構成では，２年生の占める割合が最も高く（55％），３年生のそれが最も低くなっている（11％）が，これは大会が年度末に開催されたことによるものと判断された。

父親の職業では，会社員が53％と半数以上を占め，農林漁業，商業，会社役員などは極めて少なかった。父親の学歴では，高校卒が42％と最も高い割合を示し，続いて大学卒，中学校卒がそれぞれ28％，22％であった。父親の運動部の経験についてみてみると，サッカー部の経験を有する者は17％とそれほど多くはなかったが，他のクラブを含めると「経験がある」者は73％にも及んでいた。この結果は，子どものスポーツ参与には同性の親の影響が強いとする過去の研究結果[22]を支持するものであり，父親のスポーツとの関わりが，子どものスポーツに対する関心や関わりのあり方に少なからず影響を与えていることを推察させるような結果であった。

その他，経済的豊かさについては，「非常に」と「やや」を含めて「恵まれている」とする者が全体の半数を占め，「恵まれていない」とする者は８％ほどであった。体力の程度については，「どちらともいえない」

表3．選手の競技成績

代表経験	N(%)
日本ユース代表	1(0.3)
ジュニア・ユース	7(2.5)
ジュニア代表	2(0.7)
高校選抜	4(1.4)
ブロック代表	62(22.2)
県の代表	166(59.5)
市の代表	157(56.7)

とする者の43％を中心に，ほぼ山なりの分布を示している。

表3には，選手の競技成績が，これまでに様々なレベルの大会に代表選手として選ばれた経験があるか否かという観点から示されている。選手たちのなかには，「日本ユース代表」や「ジュニア・ユース」などの代表経験を持つ者が若干ながら含まれている。また，全選手の22％がブロック代表を経験しており，60％が県の代表経験を有しているなど，優秀な選手たちであることが理解できる。

以上，本研究の目的との関連でサンプルの特徴をまとめておくならば，高校の1，2年生を中心に，様々な代表経験を有している，あるいはそのような優秀な選手たちのいるチームに所属している選手たちであること，そして，彼らの父親の多くが運動部の経験を有していたということを指摘しておくことができよう。

2．サッカー選手としてのキャリア形成過程

ここでは，選手たちがサッカーに関わるようになった時期やきっかけ，当時のサッカーの環境など，従来「スポーツへの社会化研究」として取りあげられてきた要因についてまず検討を行う。続いて，これまでの練習頻度や勉学とサッカーとの関わりなど，選手たちがどの程度サッカーへ傾倒してきたか，いわばサッカーへの没頭度の検討が行われる。前者が，選手とサッカーとの関わりの実態的な側面の検討であるとするならば，後者はその質的な側面の検討だといえるだろう。またここでは，選手たちの過去のけがの様子や，競技成績の満足度，競技への関わり方などについても検討が加えられる。

表4に示すように，サッカーを始めた時期で最も回答の多かったのが，「小学校低学年」の60％であり，「小

表4．サッカー選手としてのキャリア形成過程

サッカーを始めた時期		重要なる他者	
小学校以前	9(3.2)	両親	21(7.5)
小学校低学年	168(60.0)	兄弟	41(14.6)
小学校高学年	85(30.4)	サッカーの友人	79(28.2)
中学校	11(3.9)	小学校・中学校の一般の友人	19(6.8)
高校	7(2.5)	クラブの指導者・先生	52(18.6)
所属していたクラブ		学校の他の先生・監督	10(3.6)
地域のクラブ	23(8.2)	地域の人・指導者	12(4.3)
スポーツ少年団	150(53.6)	好きなサッカー選手	31(11.1)
民間のクラブ	9(3.2)	その他	10(3.6)
学校のクラブ	93(33.2)	N.A.	5(1.8)
企業のクラブ	0(0.0)		
その他	0(0.0)		
所属していなかった	4(1.4)		
N.A.	1(0.4)		
始めたきっかけ			
両親のすすめ	19(6.8)		
兄弟のすすめ	34(12.1)		
友人のすすめ	53(18.9)		
学校の先生・監督のすすめ	9(3.2)		
地域の人のすすめ	5(1.8)		
テレビ・新聞・漫画等の影響	36(12.9)		
地域でサッカーが盛んだった	9(3.2)		
サッカーを観戦して	5(1.8)		
好きな選手にあこがれて	5(1.8)		
自分自身の判断で	90(32.1)		
その他	13(4.6)		
N.A.	2(0.7)		

註）＿＿＿＿：質問項目　N(%)

学校高学年」の30％がそれに続いている。「中学校」や「高校」から始めた者はわずか６％に過ぎず，調査対象者の実に94％が，小学生時代，あるいはそれ以前に既にサッカーと関わり始めていたということになる。わが国の一流陸上競技者への社会化に関する過去の研究では，対象者の半数以上が，中学校以降に専門とする種目への関わりを開始していたと報告されている[6]ので，本研究の対象者の多くが，非常に早期にサッカーへの関わりを開始していることになる。しかしながら，こうした違いが種目の違いに起因するものなのか，それともその他，たとえばスポーツの高度化や競争の激化などに起因するものであるのかを判断することはできなかった。サッカーとの関わりを開始した当時所属していたクラブについては，「スポーツ少年団」が54％で最も多く，次に「学校のクラブ」の33％であった。選手養成との関わりで今日話題の，民間や企業のクラブに所属していた者はほとんどいなかった。過去のわが国一流選手についての報告では，学校運動部がスポーツ参与への重要な機関であるとされていた[6),22)]が，本研究で「スポーツ少年団」が最も高い割合を示したのは，多くの者が「小学生時代」にサッカーとの関わりを開始したためであろう。

サッカーを始めたきっかけについて，表に示すような要因のなかからその理由に最も近いもの一つを選んでもらった。人的要因のなかでは，「兄弟」や「友人」の影響が多少強いといえよう。また，過去における一流陸上競技選手への社会化研究の結果[6]と同様に，テレビ，新聞などのメディアの影響も見逃せないものとなっている。ただ，結果的に最も高い値を示したのは，「自分自身の判断で」（32％）というものであった。どのような影響が個人にあったにせよ，最終的にサッカーを始めることを決断するのは当の個人であるわけだから，このような結果が間違であるとはいえないにせよ，質問項目の設定ということでは適切ではなかったように思われる。

サッカーを始めた頃，サッカーに取り組むことに影響を与えた人，つまり社会化研究の文脈でいえば，重要なる他者に関しては，「サッカーの友人」や「クラブの指導者・先生」をあげる者がそれぞれ28％，19％であった。そして，「兄弟」，「好きなサッカー選手」の影響がそれに続いている。このような結果も，スポーツ指導者が重要なる他者であるとする過去の社会化研究の結果[5]と一部符合している。

表５には，これまでサッカーにどれくらい没頭してきたのかという，選手とサッカーとの関わりの質的側面についての情報を示した。

まずは，サッカーと勉強のどちらを重視してきたかについてみてみよう。小学校から現在に至るまで，「サッカー中心」，「ややサッカー重視」とする者は全体の90％以上であり，現在「勉強中心」だとする者は唯の一人もいない。

練習頻度についても，既に小学生時代において「ほぼ毎日」の者が全体の約半数，中学校時代になるとそれは80％ほどにもなる。彼らが子どもの頃のサッカー以外のスポーツ経験については，「他のスポーツのクラブに所属して行った」と「かなり熱心に行った」，「少しは行った」をあわせて52％であったが，「サッカーだけだった」者も46％おり，小学生時代から，スポーツの経験がサッカーに限定されている者が半数近くもいた。さらに，小，中学校時代を通じて，彼らのほぼ半数が一流選手になりたいと「強く思っていた」というように，意識面においてもサッカーへの没頭度は大変に高いものであったということが伺える。

これまでに，サッカーをすることをまわりの人々がどの程度奨励したかについては，表に掲げるすべての人々の90％以上が，「非常に」と「少し」をあわせ，「奨励」したと答えている。中学進学にあたっては，「サッカーの勧誘を受けて入学」や「サッカー中心に学校を選んだ」とする者はさすがに大勢を占めているわけではないが，それでも，そのような者が全体の10％以上いるということは注目されても良いかもしれない。

以上検討してきたように，彼らのサッカーとの関わりは非常に早期に開始され，しかもそれが当初より専門的なものであったことが伺える。このような早期の専門化傾向については種々批判や問題点が指摘されて久しい。したってここで，過去におけるけがの様子や競技成績の満足度，競技への関わり方などについてみておくことは必要であろう。

表６に示すように，過去において50％以上の者が，「入院」あるいは「通院」の必要な「けが」を経験していることが伺える。サッカーが激しい身体接触によって特徴づけられるスポーツであるとはいえ，種々議論されているように，オーバー・ユースの問題を含め少年スポーツのあり方を考えさせられるような結果ではないだろうか。

中学卒業までの競技成績の満足度については，「非常に」と「かなり」をあわせた「満足」，「どちらともいえない」，「非常に」と「かなり」をあわせた「不満足」がそれぞれ30％代であり，３局化の傾向にあるといえるだろう。

クラブは勝つことが目的だったかという問いには，「非常にそうだ」と答えた者が43％であった。またクラブをやめたいと思ったことがあるかについては，「非常に」と「やや」をあわせて，31％が「そうだ」と回答している。いずれもが，早期の専門化と勝利志向の弊害を示唆するものであろう。厳しい体罰を受けたことがあるかとの問いには，12％が「非常にそうだ」と答え，20％が「ややそうだ」と回答しており，両者をあわせ約30％の者が体罰を受けた経験を有しているということが理解できる。また，この問いに対しては，

表5． 過去のサッカーへの没頭度

サッカーと勉強				
小学校時代：	サッカー中心	ややサッカー重視	やや勉強重視	勉強中心
	179(66.1)	72(26.6)	12(4.4)	8(2.9)
中学校時代：	サッカー中心	ややサッカー重視	やや勉強重視	勉強中心
	163(59.7)	88(32.2)	18(6.6)	4(1.5)
現　在　：	サッカー中心	ややサッカー重視	やや勉強重視	勉強中心
	190(69.1)	79(28.7)	6(2.2)	0(0.0)
練習頻度				
小学校時代：	ほぼ毎日	週４～５日	週２～３日	週１日以下
	127(46.6)	61(22.3)	70(25.6)	15(5.5)
中学校時代：	ほぼ毎日	週４～５日	週２～３日	週１日以下
	221(79.8)	41(14.8)	10(3.6)	5(1.8)
一流選手へなりたいと思っていたか				
小学校時代：	強く思っていた	やや思っていた	あまり思わなかった	思わなかった
	135(49.5)	67(24.5)	44(16.1)	27(9.9)
中学校時代：	強く思っていた	やや思っていた	あまり思わなかった	思わなかった
	129(46.9)	85(30.9)	39(14.2)	22(8.0)
他者からの奨励				
家　　族　：	非常に奨励	少し奨励	あまり奨励されない	奨励されなかった
	207(74.5)	59(21.2)	9(3.2)	3(1.1)
小・中学の先生：	非常に奨励	少し奨励	あまり奨励されない	奨励されなかった
	201(72.6)	59(21.3)	13(4.7)	4(1.4)
小・中学の友人：	非常に奨励	少し奨励	あまり奨励されない	奨励されなかった
	205(74.3)	56(20.3)	11(4.0)	4(1.4)
地域の指導者　：	非常に奨励	少し奨励	あまり奨励されない	奨励されなかった
	209(76.6)	47(17.2)	9(3.3)	8(2.9)

サッカー以外のスポーツ経験		中学への進学	
他のスポーツのクラブに所属して行った	21(7.6)	サッカーの勧誘を受け入学	16(5.8)
かなり熱心に行った	31(11.2)	サッカー中心に学校を選んだ	16(5.8)
少しは行った	91(33.0)	サッカーと進学を考えた	13(4.7)
サッカーだけだった	126(45.7)	進学中心に入学	5(1.8)
スポーツはあまりしなかった	7(2.5)	地元だから入学	224(81.9)

註）　：質問項目　N(%)

表6． 競技成績の満足度など

けが：	けがで入院した	けがで通院した	家で治療した	ほとんどない	
	26(9.4)	123(44.6)	17(6.2)	110(39.8)	
競技成績の満足度：	非常に満足	かなり満足	どちらともいえない	やや不満足	非常に不満足
	30(10.9)	74(26.9)	83(30.2)	51(18.5)	37(13.5)
クラブは勝つことが目的だった：	非常にそうだ	ややそうだ	そうではない		
	118(42.8)	116(42.0)	42(15.2)		
クラブをやめたいと思ったことがある：	非常にそうだ	ややそうだ	そうではない		
	29(10.5)	57(20.7)	190(68.8)		
厳しい体罰を受けたことがある：	非常にそうだ	ややそうだ	そうではない		
	29(11.6)	48(19.2)	173(69.2)		

註）＿＿＿＿：質問項目　N(%)

その他の問いと比較して非常に多くの者が回答を保留している。このことが何を暗示しているのか，様々に推察しておくことも必要であろう。つまり，体罰の経験をあえて語ろうとしない者がいたのではないか，ということをである。

以上のように，今日の高校サッカー界における一流選手は，学校のクラブやスポーツ少年団を中心に，非常に早期に，しかも勉強との比較においても，他のスポーツ活動との比較においてもほぼ独占的にサッカーと接触を開始している。多くの者は，そうしたサッカーとの関わり合いの開始を，自らの主体的判断によるものと回顧しているが，兄弟や友人といった人的影響や，メディアの影響も無視できない要因であった。彼らがサッカーと接触することをまわりのほとんどの人々も奨励し，彼らのサッカーへの取り組みについても，サッカーの友人や指導者などサッカー関係者が影響を及ぼしていた。また，彼らの多くはその頃から，一流選手というキャリア獲得を強く望んでおり，クラブ活動の目的を勝利におくなど，意識面におけるサッカーとの強い関わり合いも指摘できた。多くの者にとってサッカーは，中学校への進学を左右するほどのものではなかったとはいえ，このようなキャリア形成の道のりには，度々指摘されるようなけがや活動意欲の減退，体罰の問題などマイナス面が同伴していることも明らかとなった。

以上のような，サッカー選手としてのキャリア形成過程を分析した本研究の結果は，一流選手の社会化過程に関する過去の知見と一部符合したが，スポーツへの関わりを開始した時期が非常に早期であったという点と，関わりを持った場所に関して違いが生じた。

3．現在のサッカー生活

ここでも，まずは現在のサッカー生活の実態的な側面について検討を行い，その後に，サッカーに伴うメリットやデメリットなど他の側面についてみてみようと思う。

表7に示すように，現在の高校を進学先として選んだ理由については，「サッカーで有名」が32％で最も多く，次に「良い指導者がいるため」の30％が続いている。以上の2つの理由と，「高校からの勧誘」の15％をあわせると，75％以上の者にとって進学の理由としてサッカーが重要な要因になっているということが理解できよう。しかしながら，現在の住まいについてみてみると，72％の者が「自宅から通学」と答えていることから，多くの者が自宅から通える範囲のサッカーで有名な高校を進学先に選んだということであろう。

遠征の日数やそのための費用について，次にみてみよう。日数では20日から69日の範囲に80％ほどの者があてはまっている。遠征のための費用については，「学

表7．現在のサッカーの環境

今の高校を選んだ理由		遠征の日数	
サッカーで有名	90(32.1)	100日以上	22(7.9)
良い指導者がいるため	82(29.3)	99～70日	20(7.1)
サッカー関係者のすすめ	6(2.1)	69～40日	118(42.1)
高校からの勧誘	42(15.0)	39～20日	104(37.1)
中学の先生・監督のすすめ	21(7.5)	19日以内	6(2.1)
サッカーの友人のすすめ	0(0.0)	N.A.	10(3.6)
両親・兄弟のすすめ	7(2.5)	遠征の費用	
施設・環境が良い	3(1.1)	学校や後援会から	109(38.9)
家から近かったから	6(2.1)	かなりの額を自己負担	74(26.4)
進学のため	10(3.6)	ほとんど自己負担	81(28.9)
その他	12(4.3)	その他	7(2.5)
N.A.	1(0.4)	N.A.	9(3.2)
現在の住まい			
サッカー部専用の寮	24(8.6)		
サッカーの先生の家	7(2.5)		
サッカーの友人の家	0(0.0)		
アパート・下宿・親戚などの家	41(14.6)		
普通の学生と同じ寮	4(1.4)		
自宅から通学	202(72.1)		
その他	0(0.0)		
N.A.	2(0.7)		

註）＿＿＿＿：質問項目　N(%)

表8．サッカーに伴うメリット・デメリット等

サッカーを続けることについての悩みや不安		サッカーを続けてきて良かったこと	
技術が伸びないこと	54(31.6)	友人ができた	69(27.9)
先生や友人とのこと	2(1.2)	いい先生と出会った	8(3.2)
クラブなどのあり方	2(1.2)	進学・就職に有利	18(7.3)
経済的なこと	9(5.3)	健康・体力が向上	10(4.0)
将来の進学・就職・勉強のこと	86(50.3)	性格的・精神的に向上	37(15.0)
健康・ケガのこと	17(9.9)	さまざまな経験ができた	103(41.7)
その他	1(0.6)	有名になった	1(0.4)
		その他	1(0.4)

けが：けがで入院した　24(8.6)　けがで通院した　110(39.6)　家で治療した　21(7.6)　ほとんどない　123(44.2)

競技成績の満足度：非常に満足　30(10.8)　かなり満足　64(23.1)　どちらともいえない　99(35.7)　やや不満足　61(22.0)　非常に不満足　23(8.3)

クラブは勝つことが目的である：非常にそうだ　199(71.1)　ややそうだ　66(23.6)　そうではない　15(5.4)

クラブをやめたいと思ったことがある：非常にそうだ　36(12.9)　ややそうだ　91(32.6)　そうではない　152(54.5)

厳しい体罰を受けたことがある：非常にそうだ　19(6.8)　ややそうだ　46(16.4)　そうではない　215(76.8)

註）＿＿＿＿：質問項目　N(%)

校や後援会から」出る者が40％ほどいるものの，「かなり」と「ほとんど」をあわせると55％の者は「自己負担」していることがわかる。

次に，サッカーに伴うメリット・デメリットなどについてみてみよう（表8参照）。まず，サッカーを続けることに伴う悩みや不安がある者62％のうち，32％の者が「技術が伸びないこと」というサッカーそのものに関わる悩みをあげている。しかしながら，それ以上に高い価を示している（50％）のが「将来の進学・就職・勉強のこと」という悩みや不安である。このことは，小学校時代より物理的な関わりにおいても意識面での関わりにおいても，サッカーが生活の中心であったことに由来する悩みや不安であると解釈されよう。この点に関しては，オリンピック選手を対象とした過去の研究においても，選手生活における悩みとして，男子で「学業」をあげる者が多いとの報告[18]がある。以上のデメリットとは逆に，サッカーを続けてきて良かった理由としては，「さまざまな経験ができた」の42％を筆頭に，「友人ができた」（28％），「性格的・精神的に向上」（15％）が主要なものとしてあがってきている。

けがの経験は中学校までの状況と酷似しており，「入院」や「通院」の必要な「けが」を経験した者は，48％ほどになる。また，クラブは勝つことが目的であるかという問いには，71％が「非常にそうだ」と回答している。中学校までの状況と比較すると，「非常にそうだ」への回答は30％近くも増えたことになる。高校進学とともに，ますますサッカーが勝利志向的な状況で行われるようになったということであろう。クラブをやめたいと思ったことがあるかには，「非常に」と「やや」をあわせ35％が「そうだ」と回答しているが，この値も中学校までの状況と比較すると，若干ながら高い。一方，厳しい体罰を受けた経験を有すると回答した者は，現在において減少している。

現在のサッカー選手としての生活についてまとめておこう。多くの者が自宅から通学可能な高校へ進学したとはいえ，中学への進学時にサッカーが与えた影響とは対称的に，高校への進学にあたっては，一流選手としてのキャリア継続の強い志向性が伺えた。活動面では，ほとんどの者が試合や合宿などで年間一月から二月を費やしており，そのための経済的な負担も軽視できないものと推察された。クラブ活動の目的としてますます勝利が重視されるなか，けがや活動意欲の減退などの問題がこれまで以上に大きなものとなっているようであった。また，サッカーを続けることへの悩みや不安が，過去に報告された一流選手の抱えているそれらと符合することが明かとなった。

4．これからのサッカー生活

ここでは，選手たちが考えている卒業後の進路について，職業としてのサッカー選手との関わりを含め明らかにしていきたい。

表9に示すように，高校卒業後の進路については，「大学チームでがんばりたい」とする者が32％と最も

表9．これからのサッカー生活について

高校卒業後の進路		30歳ごろ、サッカーを続けていると思うか	
すぐにプロに入りたい	35(12.5)	プロで活躍しているだろう	42(15.3)
サッカー留学したい	12(4.3)	実業団・教員チームなどで続けているだろう	37(13.5)
実業団チームに入りたい	23(8.2)	学校や地域でサッカー指導を行っているだろう	45(16.4)
就職しサッカーを楽しみたい	25(9.0)	就職してサッカーを楽しんでいるだろう	88(32.1)
大学卒業後にプロに入りたい	42(15.1)	別なスポーツを楽しんでいるだろう	12(4.4)
大学チームでがんばりたい	88(31.5)	スポーツはやめているだろう	23(8.4)
進学後、教員などのサッカー関係の職につきたい	20(7.2)	その他	27(9.9)
進学後はサッカーを楽しみたい	17(6.1)		
高校を出たらサッカーをやめたい	5(1.8)		
その他	12(4.3)		

高校卒業の時Ｊリーグと大学から勧誘されたら

Ｊリーグに入る	その大学に行く	別の会社に就職する	普通に進学する
128(46.4)	117(42.4)	10(3.6)	21(7.6)

サッカー選手としての夢		あなたからサッカーを取ったら	
プロの選手になること	74(26.8)	別にやりたいことがあるので大丈夫	20(7.2)
ワールドカップ出場	39(14.1)	何とかして別のことをさがしてみる	66(23.9)
日本代表	28(10.1)	できる範囲でサッカーを続けたい	160(58.0)
大学日本一	0(0.0)	サッカーができなければ死んだと同じだ	30(10.9)
大学のレギュラー	7(2.5)		
高校日本一	81(29.3)		
高校のレギュラー	35(12.7)		
別にない	12(4.3)		

註）＿＿＿＿：質問項目　N(%)

高い値を示している。職業としてのサッカー選手という，真の意味でのキャリア志向を示す者は，「すぐプロに入りたい」の13％と「大学卒業後にプロに入りたい」の15％をあわせて，28％であった。しかしながら，「大学チームでがんばりたい」と答えた者のなかにも，将来的にはプロのキャリアを志向する者が含まれているはずであり，その値は現実的にもう少し高いものとなるように思われる。「就職してサッカーを楽しみたい」や「進学後はサッカーを楽しみたい」，「高校を出たらサッカーをやめたい」などの考えを有する者は，ごく少数であった。高校卒業の時，Ｊリーグと大学から勧誘されたらどうするか，との仮定法の質問では，「Ｊリーグに入る」，「その大学に行く」はそれぞれ46％，42％と高い値を示している。サッカー選手としての夢については，「高校日本一」が29％で最も高い値を示し，次に「プロの選手になること」が27％と続く。まったく不思議なことに，高校卒業後の進路について，32％の者が「大学チームでがんばりたい」としていたにも関わらず，「大学日本一」をサッカー選手としての夢だとする者は唯の一人もいなかった。

30歳ごろ，サッカーを続けていると思うかとの質問には，32％が「就職してサッカーを楽しんでいるだろう」と答え，「学校や地域でサッカー指導を行っているだろう」や「プロで活躍しているだろう」，「実業団・教員チームなどで続けているだろう」などがこれに続いている。「別なスポーツを楽しんでいるだろう」や「スポーツはやめているだろう」などの回答は，それぞれ10％にも満たなかった。

最後に，あなたからサッカーを取ったらどうなるかとの質問には，「できる範囲でサッカーを続けたい」とする者が58％を示し，関わりの深さを推察させる結果であった。また，「サッカーができなければ死んだも同じだ」とする者も11％ほどながら存在し，「別にやりたいことがあるので大丈夫」とする者は７％と最も少なかった。今の彼らにとって，サッカーとの関わりを抜きにした生活など考えも及ばないということなのであろうか。

以上のように，高校サッカー界の一流選手において，プロとしてのキャリア志向を明確に示している者は全体の約30％であった。しかしながら，このことは，彼らが卒業と同時にサッカーとの関わりをなくしたい，あるいはそうなることを喜んで受け入れるということを意味するものでは決してない。プロを意識しないにせよ，多くの者は大学チームで活躍することを望んでいるのであり，30歳という年齢段階においてすら，可能な限りサッカーとの関わりを続けていきたいとする意識が非常に強いからである。

ま と め

16高校の一流サッカー選手たち280名を対象に，一

流選手としてのキャリア形成過程，キャリア生活の実態，及び将来のキャリア志向を明らかにするための調査を行った。その結果，次のようなことが明らかとなった。

今日の高校サッカー界における一流選手は，兄弟や友人，メディアの影響を受けながら学校のクラブやスポーツ少年団を中心に，非常に早期に，しかもほぼ独占的にサッカーと関わり始めていた。彼らの多くは，その頃から一流選手というキャリアの獲得を強く望んでおり，そのことが高校進学を決定づけていた。以上のような結果は，過去のスポーツ選手への社会化研究で報告されている知見を一部支持するものであった。

現在のサッカー生活に関しては，遠征や合宿に多くの時間を費やしており，そのための経済的な負担も軽視できないものであった。勝利という活動目的がますます強調されるなか，けがや活動意欲の減退などの問題も生じていた。活動に伴う不安として，将来の進学や勉強，就職のことあげる者が多くいた。

将来に関しては，大学チームで活躍するという志向を持つ者と，高校卒業，あるいは大学卒業後にプロ選手になるという志向を持つ者とがほぼ同様の割合で存在していた。

彼らにみるように，幼少時からの夢を現在まで，あるいは将来の職業と関連させながら描けるということは，行き先不透明な現代社会においては誠に希有なことであり，そのような人生をこれから先現実に送るとができるとすれば，それは多くの人々の羨望を集めるような生き方であるのかも知れない。とはいえ，職業としてスポーツ・キャリアを継続したいという希望を持つすべての者の望みが叶えられるほど，職業としてのサッカー選手のニーズは高くはないことも明白である。また，その夢が現実のものとなったとしても，職業選手の引退は他の職種に比べ異様に早い。このような状況に直面した時，彼らは何を資本に別の職業生活を開始することになるのであろうか。サッカーを続けることに不安や悩みを有する者の半数が，将来の職業や勉強のことをそれとして掲げているのは，こうした不安を先取りしたものではないのだろうか。多くの者は，彼らが現在，そして将来においてどのような困難に直面しようとも，それは彼らが勉強もせずにサッカーに専心してきたことの代償であるという，当該個人の責任を強調する立場を支持するだろう。だけれども，勉強もせずに彼らを「サッカー漬け」にしてきたまわりの大人や指導者の責任は，果たしてないといい切れるものなのであろうか。「選手のその後」は，「選手になること」，あるいは「選手であること」以上に，もっと研究される必要のある重要な問題をはらんでいるように思われる。

付　記

本研究は，文部省科学研究費による補助（基盤研究C，2 課題番号07808010）を受けて行われた研究の一部である。

註

1）「スポーツへの社会化」に関しては，理論的，実証的研究が数多く存在する。理論的な研究では，社会化される主体の能動性をどのように保障するのかがこれまでの主要な論点であった。これについては，拙稿[16),23)]を参照されたい。実証的な研究は数えられないほどあるが，これまでの研究の成果と課題を知る上で文献4),9),22)が有益である。

2）多々納[19)]より引用。ただし括弧内は著者。

3）昨今のＪリーグ・チームからのスポンサーの突然の撤退や，選手の解雇や年俸の大幅カットなどの問題は，プロ・サッカー選手という職業が，非常に希少であるということに加え，大変不安定なものでもあるということを示している。

文　献

1）Allison, M. T. and Meyer, C.: Career Problems and Retirement Among Elite Athletes: The Female Tennis Professional. Sociology of Sport Journal, 5:212-222, 1988.

2）Coakley, J. J.: Leaving Competitive Sport: Retirement or Rebirth?. Quest, 35:1-11, 1983.

3）Curtis, J. and Ennis, R.: Negative Consequences of Leaving Competitive Sport? Comparative Findings for Former Elite-Level Hockey Players. Sociology of Sport Journal, 5:87-106, 1988.

4）海老原　修：スポーツ社会化における成果と課題. 体育・スポーツ社会学研究, 10:153-171, 1991.

5）江刺正吾：一流競技者のスポーツへの社会化にみられる性差とその規定要因の検討．体育社会学研究，10:1-34，1981.

6）深沢　宏：一流陸上競技者への社会化に関する日・加比較研究. 体育社会学研究, 10:49-62, 1981.

7）G. S. ケニヨン（日下裕弘訳）:スポーツとのかかわり合い—概念構築のための試論とその結果．粂

野　豊監・訳，スポーツと文化・社会．ベースボール・マガジン社，1988. pp. 57-66.（Kenyon, G. S.: Sport Involvement: A Conceptual Go and Some Consequences Thereof. In Loy, J. W., Kenyon, G. S. and McPherson, B. D. (Eds.), Sport, Culture and Society: A Reader on The Sociology of Sport. Lea and Febiger, Philadelphia, 1981. pp. 33-38.）

8）G. S. ケニヨン，B. D. マックファーソン（山本教人，中塚義実訳）：身体活動やスポーツにかかわりあうようになること―社会化の過程．粂野　豊監・訳，スポーツと文化・社会．ベースボール・マガジン社，1988. pp. 331-361.（Kenyon, G. S. and McPherson, B. D.: Becoming Involved in Physical Activity and Sport: A Process of Socialization. In Loy, J. W., Kenyon, G. S. and McPherson, B. D. (Eds.), Sport, Culture and Society: A Reader on The Sociology of Sport. Lea and Febiger, Philadelphia, 1981. pp. 217-237.）

9）原田宗彦：ソシアリゼーション．体育の科学，41: 508-514，1991.

10）影山　健，今村浩明，佐伯聰夫：スポーツ参与の社会学について．体育社会学研究，6:10-13，1977.

11）Kleiber, D. A. and Brock, S. C.: The Effect of Career-Ending Injuries on the Subsequent Well-Being of Elite College Athletes. Sociology of Sport Journal, 9:70-75, 1992.

12）Lerch, S. H.: The Adjustment to Retirement of Professional Baseball Players. In Greendorfer, S. L. and Yiannakis, A. (Eds.), Sociology of Sport: Diverse Perspectives. Leisure Press, N.Y., 1981. pp. 138-148.

13）McPherson B. D., Curtis, J. E. and Loy, J. W.: Sport, Socialization, and the Family. In McPherson B. D., Curtis, J. E. and Loy, J. W. (Eds.), The Social Significance of Sport: An Introduction to The Sociology of Sport. Human Kinetics Books, Illinois, 1989. pp. 37-63.

14）文部省：平成７年度学校保健統計調査報告書．大蔵省印刷局，1996. p. 19.

15）森岡清美他編：社会学事典．有斐閣，1993. p. 268.

16）岡田　猛，山本教人：スポーツと社会化論に関する一考察―Social Agent と Socializee の相互作用の観点から―．体育・スポーツ社会学研究，3:79-95，1984.

17）Rosenberg, E.: Gerontological Theory and Athletic Retirement. In Greendorfer, S. L. and Yiannakis, A. (Eds.), Sociology of Sport: Diverse Perspectives. Leisure Press, N.Y., 1981. pp. 118-126.

18）鈴木　守，粂野　豊，古屋正俊：一流競技者の育つ条件とその意識について ―オリンピック選手の調査から―．体育社会学研究，10:63-83，1981.

19）多々納秀雄：エリート・スポーツ選手における引退後の生活と意識．学校体育，36(6):128，1989.

20）Thomas, C. E. and Ermler, K. L.: Institutional Obligation in the Athletic Retirement Process. Quest, 40:137-150. 1988.

21）Werthner, P. and Orlick, T.: Retirement Experience of Successful Olympic Athletes. International Journal of Sport Psychology, 17: 337-363, 1986.

22）山口泰雄，池田　勝：スポーツの社会化．体育の科学，37(2):142-148，1987.

23）山本教人：Mead 理論の検討とそのスポーツ的社会化論への適用可能性：「I」は主体性のベースか．体育学研究，38:413-424，1994.